詠む広場

新年をことほぐ

初日　小川　軽舟

やどりぎの高きに曙光年明くる
初日さす竹藪に風なみなみと
向う疵見せて勝独楽止まりけり
いちにちに浮く綿ぼこり寝正月

福茶　西村　和子

鉄瓶の重み頼もし大福茶
音読に適ふ一書を読始
買初の一帖二管三十葉
対岸へ放水伸びよ出初式

風音　井上　康明

元日の空果てしなき山の国
募りたる山越えの風去年今年
白雲が隠す風音小正月
繭玉の村つつみたる山明かり

竜　片山由美子

年の夜の眼鏡たたみて眠らせて
主峰なほ雲の中なる初山河
わが干支の竜のぼりゆく初御空
初夢の断崖どこまでも歩き

毎日俳壇

小川　軽舟　選

人形の目玉真つ黒冬ざるる
京田辺市　加藤　草児
△評▽命がないとは思えない黒くつぶらな目。どんな人形でもよいが、私は冬枯れの庭を見つめる市松人形を思った。

病室より眺む団地の干蒲団
千葉市　木村　史子
△評▽日の差さない病室の窓の向かいに日を浴びた団地の干し布団。その対照が印象に残る。

手の中に爪繰るニュース息白し
北本市　萩原　行博
あはあはと山より低きしぐれ虹
西宮市　平田　あい
ポケットにねぢこんでゆく冬帽子
大阪　芹澤　由美
冬ざれやシリアル撥ねし皿の音
東広島市　福岡　宏
星の無き独りの夜や火恋し
日高市　落合　清子
小春日やマスターの飼う九官鳥
国立市　佐藤　建
皮ジャンの群れなすバイク工場前
新居浜市　寺村　洋子
バスを待つ束の間に消ゆ冬の虹
岡崎市　加藤　幸男

西村　和子　選

山茶花やかの指切は果たされず
東京　高木　靖之
△評▽咲くよりも散るほうが目立つサザンカと、はかない約束とが響きあっている。果たされなかった約束は美しい思い出だ。

戦況にはじまるニュース毛糸編む
新居浜市　今井　忍
△評▽戦争のニュースと、平和な日常との落差。現代人のやるせなさを具体的に提示した句。

雪雲の晴れて伊吹の真白なる
長浜市　中島　正則
枇杷の花陽のあるうちに小買物
坂戸市　沼井　和江
滞るもの置き去りに冬の雨
名古屋市　鈴木　幸絵
補聴器の外れしままの日向ぼこ
奈良　野上　千俊
結局は妻が立ちたる掘炬燵
郡山市　井上　博
顔ぶれは昨日と同じ日向ぼこ
甲府市　村田　一広
冬日和隣人今日もしづかなる
大阪市　吉田　昌之
朝掻き夕に掃くや散紅葉
岡崎市　加藤　幸男

井上　康明　選

息白く短き言葉吐きにけり
野田市　塩野谷慎吾
△評▽短い言葉はあまりの寒さのためだろう。例えば朝の市場、白い息とともに短い言葉を発しながら、人々はきびきびと働く。

日向ぼこ終へてこの世に戻りけり
横浜市　瀬古　修治
△評▽冬の日を浴び極楽のような日なたぼこから、一転して世知辛いこの世へ戻って来たのだ。

初夢の鷹日輪へ消えゆけり
相模原市　小山　鞠子
初雪のなかへ離陸の機体消ゆ
いわき市　四宮　公男
凩や母の匂ひの葛根湯
東京　徳原　伸吉
寒柝の一打につづく子等の声
東京　山口　治子
弾込めてより猟銃の艶を増す
北本市　萩原　行博
開眼の墓に集まる冬の雲
久留米市　持地　恒美
空海の着きし浜辺や冬怒濤
伊賀市　福沢　義男
手作りの紙芝居なりクリスマス
狭山市　小俣　友里

片山由美子　選

遊ぶ子の落葉の匂ひたのもしき
町田市　枝澤　聖文
△評▽「たのもしき」に、庭を駆け回る子の元気な様子がうかがえる。晴れた日の香ばしい落葉の匂いがしてきそうだ。

亡き人のことには触れず忘年会
志木市　谷村　康志
△評▽集まったメンバーの共通の知人らしいが、忘年会が暗くならないようにとの皆の思い。

朝見ればまた一面の落葉かな
湖西市　宮司　孝男
ひと口のあとは一気に玉子酒
和歌山市　曽根　澄子
菊花展入口前のはやにほふ
羽生市　今成　公江
白鳥の一斉に首伸ばしけり
土岐市　水野　雅子
パスワードに残る犬の名冬銀河
犬山市　村上　洋子
突堤に釣り人ひとり寒夕焼
国分寺市　野々村澄夫
おでんさへあれば何とかなる夕餉
海南市　塚月　凡太
もう影を持たぬ高さの冬の蝶
郡山市　井上　博

投稿規定　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます